



# 荒川左岸南部流域下水道 50年のあゆみ



# 荒川左岸南部流域下水道 通水 50 周年

昭和42年  
(1967年)

事業着手当初の  
鴨川幹線

荒川左岸南部流域下水道の  
槌音は鴨川幹線築造工事から  
始まった。同幹線はその大部  
分が同年開催の埼玉国体に向  
け工事中であった国道 17 号新  
大宮バイパス直下に布設され  
た。バイパス工事と調整を図  
りつつ、河川や鉄道の横断箇  
所もあり、工程管理や現場対  
応で苦労も多かった。



当時の街並み

彩の国流域下水道  
の第一歩



工事風景

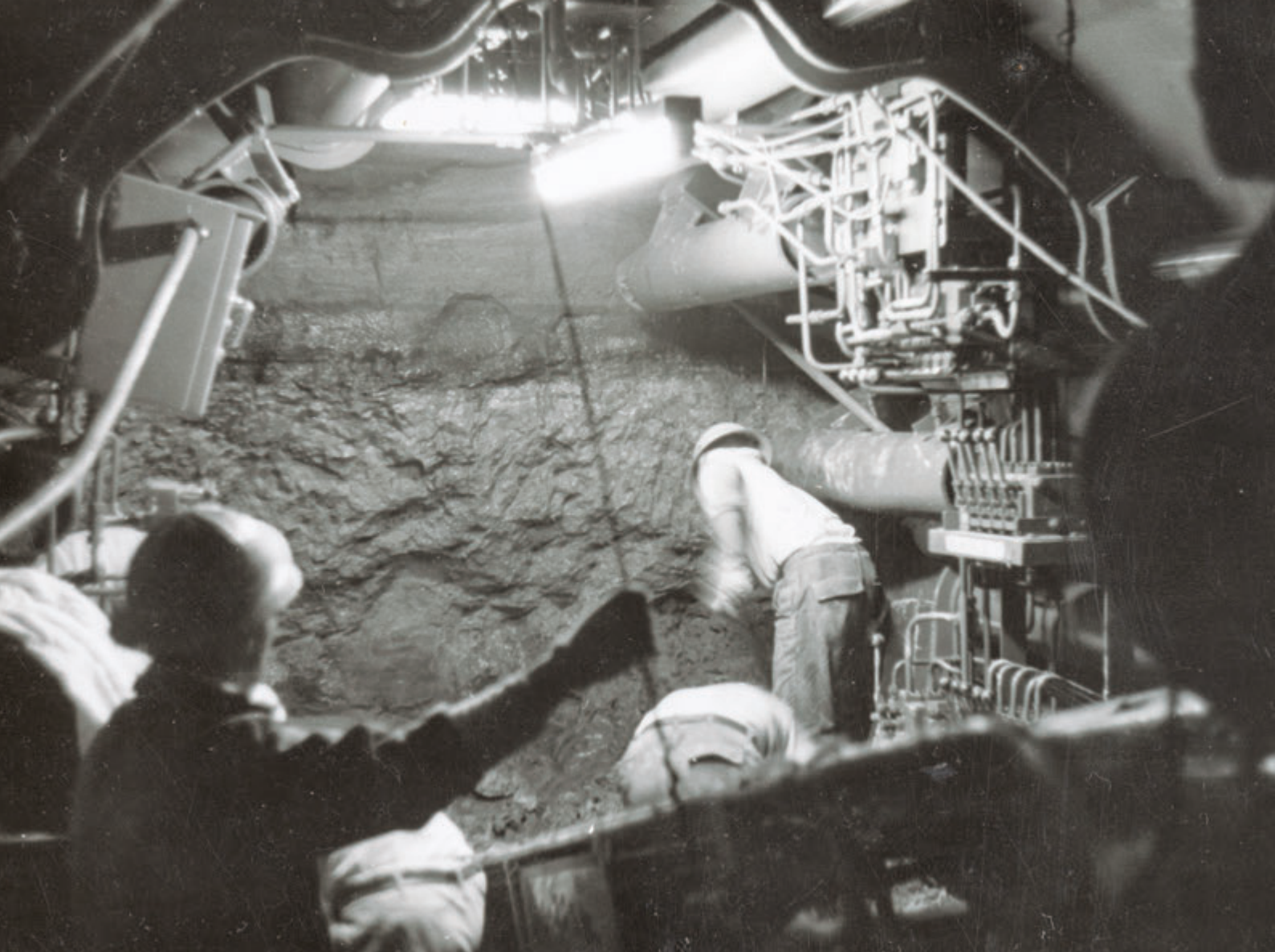


重機による開削工事



掘削した土砂を排出

## 新大宮バイパス工事 と合わせた幹線整備



推進現場



下水道管を吊り下ろす

# 大口径ヒューム管を 長距離推進施工



トロッコを使用して土砂搬出



視察風景

# 荒川左岸流域下水道通水



式典の様子（畑 和 県知事挨拶）

## 昭和47年 (1972年)

### 荒川処理センター 通水式



式典の様子（来賓席）

昭和41年（1966）年の事業着手から約7年を経て、荒川左岸南部流域下水道の要となる荒川処理センター（現 荒川水循環センター）が一部供用を開始した。10月3日には畑 和 県知事、秦 明友 荒川左岸流域下水道組合管理者（大宮市長）ら関係者約600人を集め盛大に通水式が挙行された。

# 日本で2例目の 流域下水道が通水



視察風景



職員の集合写真

# 昭和49年 (1974年)

## 第3回 日米下水処理委員会

都市化の進展が著しい8市(現 5市)を対象とした荒川左岸流域下水道(現 荒川左岸南部流域下水道)は、東洋一とも言われた大規模な計画であった。荒川処理センター(現 荒川水循環センター)への大型コンピューターシステムの導入といった最先端の技術は世界的にも注目され、第3回日米下水処理委員会などで海外から多くの視察者が訪れた。



委員の到着

### 最先端の下水道を 海外の技術者に示す



会議風景





視察風景



委員から質問を受ける久保 尠 建設省下水道部長（当時）



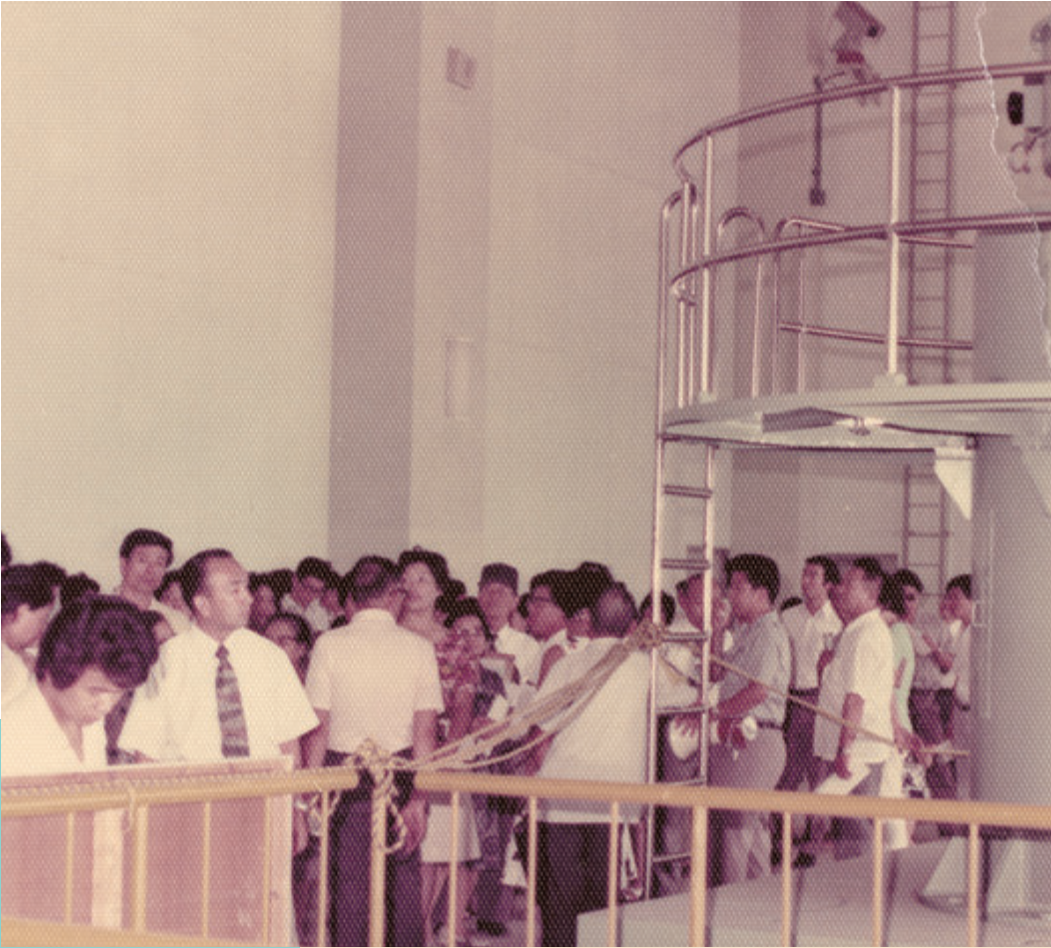
# 昭和50年 (1975年)

## 第15回 全国 下水道促進デー

毎年9月10日の全国下水道促進デー（現 下水道の日）に合わせて施設見学会を開催し、多くの県民が荒川処理センター（現 荒川水循環センター）を訪れ、下水道事業への関心を深めた。こうした取組は、現在は10月に開催している荒川・下水道フェスタに受け継がれている。



# 水環境と水質保全の要 処理施設への関心高く





畑 和 県知事挨拶

# 昭和52年 (1977年)

## 南部中継ポンプ場通水式

鴨川幹線に続き、流域の東半分の下水を集める南部幹線・芝川幹線が整備された。これらの下水を荒川処理センター（現 荒川水循環センター）に送る重要施設が流域最大規模の南部中継ポンプ場である。4月7日の通水式では畑 和 県知事がスイッチオン。現在も同センター流入下水の約半分（約 30 万 $\text{m}^3$ /日）を送水している。

流入下水の約半分を送水  
最大規模ポンプ場が稼働



来賓席



視察風景



スイッチオン



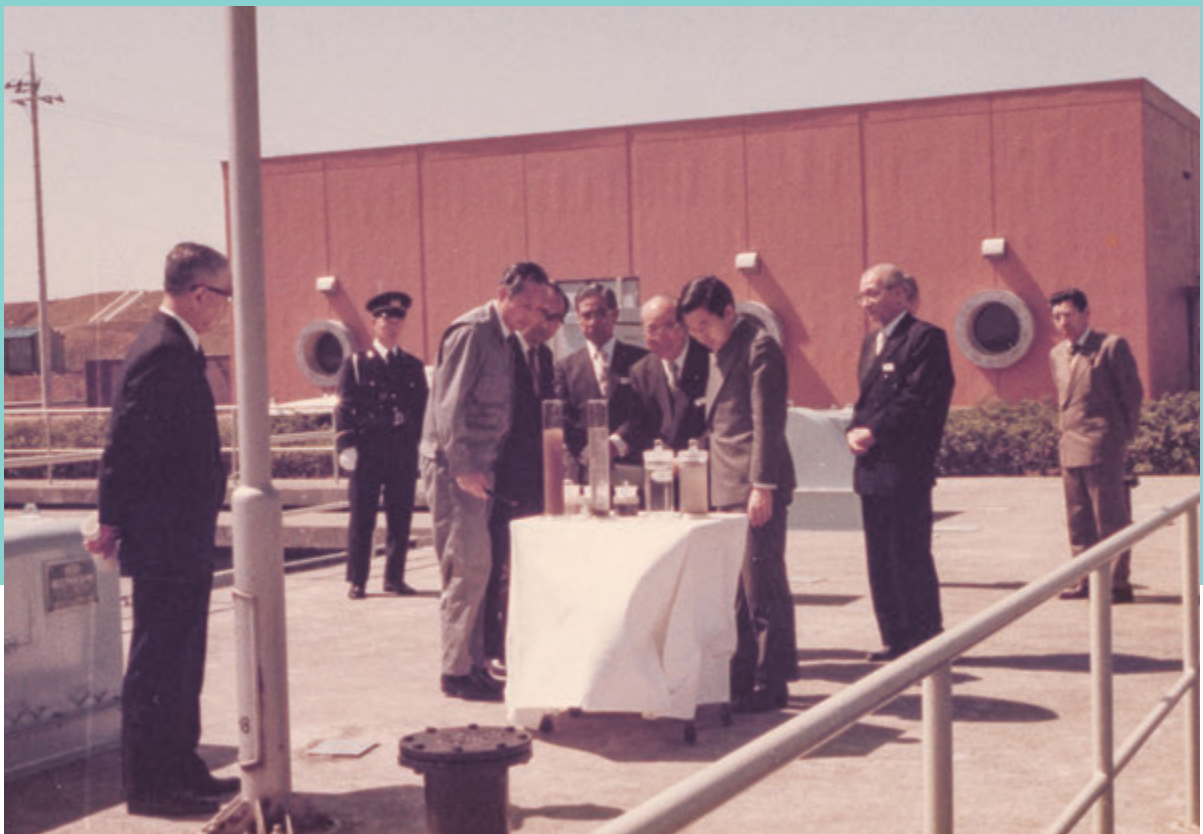
皇太子殿下（現 上皇陛下）

# 昭和52年 (1977年)

## 皇太子殿下 (現 上皇陛下) 行啓

4月11日、皇太子殿下（現 上皇陛下）が荒川処理センター（現 荒川水循環センター）をご視察。下水道の最新技術に触れ、水環境保全について理解を深められた。

## 皇太子殿下が 荒川処理センターをご視察



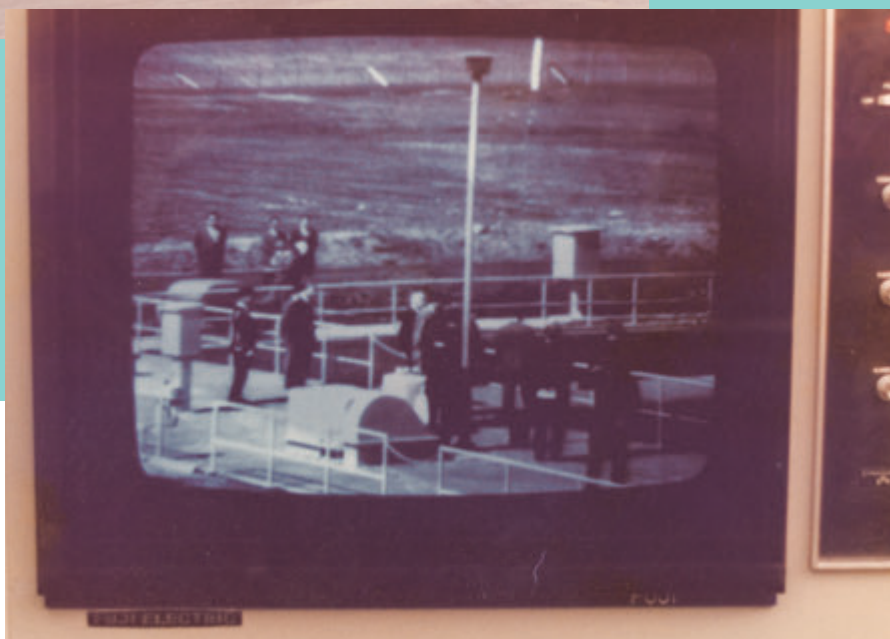
ご視察風景



ご視察風景



職員によるお見送り



テレビでご視察の様子が放映される



平成8年  
(1996年)

くす玉割りで通水を祝う

## 三崎中継ポンプ場 通水式

旧国鉄施設等跡地を再開発し首都機能を補完する「さいたま新都心」が平成12年（2000年）に街びらきした。これに先立ち各種インフラの整備が進められたが、荒川左岸南部流域下水道においてもさいたま新都心地区の下水を集める芝川準幹線と三崎中継ポンプ場を整備。5月12日に通水式を迎えた。



地元の幼稚園児たちと記念植樹に水やり





視察風景

新都心誕生に向けて  
ポンプ場を先行整備



式典後の風景



さいたま新都心地区

平成12年  
(2000年)

さいたま新都心へ  
再生水を供給開始

新都心地区の水需要の逼迫を受け、さいたま新都心地区再生水供給事業が4月1日にスタートした。生物膜ろ過とオゾンで高度処理した下水処理水を再生水(中水)として送水し、トイレ用水等に使用することで、節水型リサイクル社会の形成に貢献している。

新都心への再生水供給で  
逼迫する水需要に対応

さいたま新都心浄化プラント



さいたま新都心浄化プラント



さいたま新都心  
浄化プラント全体風景

## 荒川水循環センターの変遷

荒川左岸南部流域下水道の処理区域の下流地区は、産業・経済の急激な発展により都市化が著しく、また広域処理のため終末処理場が大規模となることから、その位置決定や用地取得が難航。その結果、用地の大部分が荒川河川敷に位置することとなった。平成 18 年（2006 年）には荒川処理センターから荒川水循環センターに名称を変更。上部公園の整備、段階的の高度処理や次世代型汚泥焼却施設を導入するなど時代に合わせて変化を遂げている。



荒川処理センター全体風景（昭和 54 年以前撮影）



荒川処理センター風景（昭和52年頃）



荒川処理センター風景（昭和52年頃）



荒川処理センター全体風景（平成16年2月撮影）

荒川水循環センター全体風景（平成26年3月撮影）

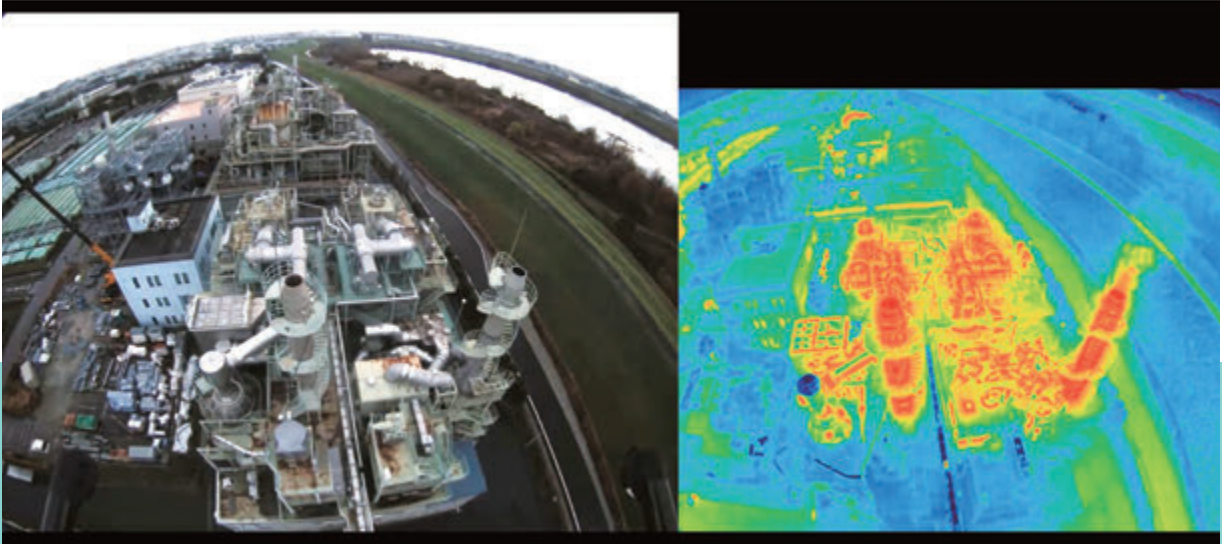




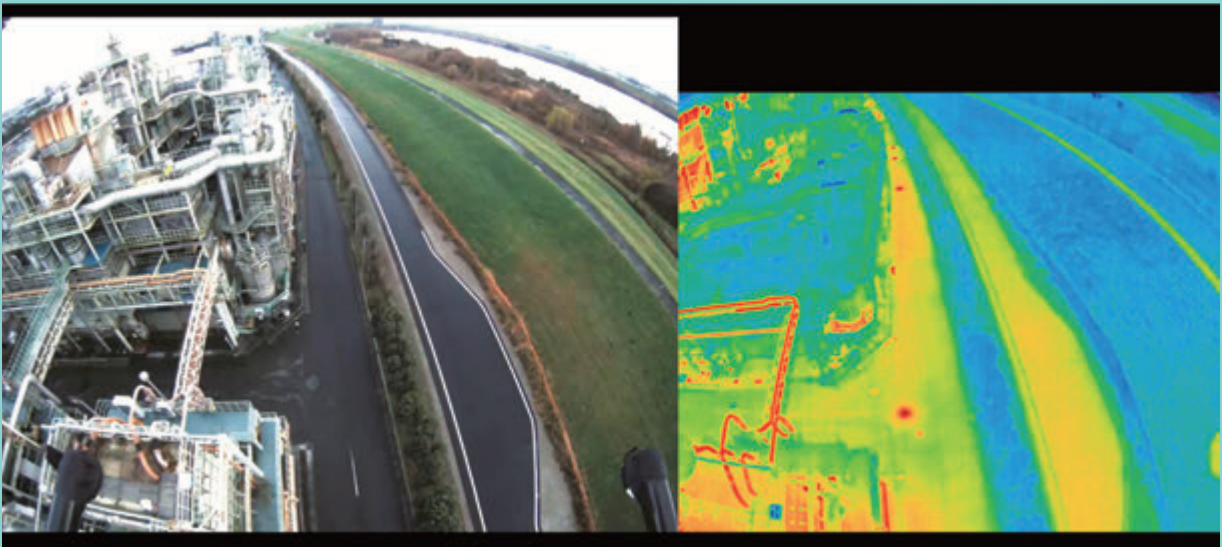
荒川水循環センター全体風景（令和3年6月撮影）

次代のニーズに合わせて  
新技術を開発・導入





焼却炉熱の可視画像



人孔熱の可視画像